

～教室終了者と中断者のベースラインの比較を通して～

ふじた ともこ
藤田 俱子 (宝塚大学 看護学部)

【背景】平成20年度に特定健診・特定保健指導が開始され、継続的支援では3か月以上の継続した関わりを実施する必要がある。こうした継続した関わりとして企画された健康教育は、プログラムの終了まで参加することにより効果を期待される。しかし、多くの場合教室に最後まで参加できず途中で脱落する者がみられる。

【目的】本研究の目的は、教室参加者と中断者の教室初回参加時の状況を比較し教室参加に関連する要因を明らかにすることである。

【方法】本研究は中高年者を対象とした介入研究の二次的分析である。平成19年に実施した健康づくり教室（以下教室）参加者43名を対象とした。ベースラインの状況を教室に最後まで参加した参加群（13名）と途中で脱落した中断群（30名）の2群に分け比較した。調査内容は健康習慣指数（HPI）、一般性自己効力感、情緒的支援ネットワーク、主観的健康観、特定健診質問票の生活習慣、生活習慣改善の準備性とした。調査は教室初回時に自記式質問紙調査として実施した。対象者へは口頭と文書により研究の趣旨と方法、研究への参加は任意であり途中でとりやめても不利益を被らないことを説明し、同意を得た。分析は正規性のある変数をt検定、正規性のない変数をMann-WhitneyのU検定、 χ^2 検定とし、5%有意水準とした。

【結果】健康づくり教室参加者の年齢の平均（SD）は50.7(12.0)歳、性別は男性が26

名(59.1%)、女性が17名(38.6%)であった。男性の年齢の平均（SD）は48.8(12.5)歳、女性は53.6(11.0)歳であった。教室参加群と中断群の群間比較では、年齢の平均（SD）が参加群は59.1(6.5)歳、中断群が47.1(12.1)歳と有意に参加群が高かった（ $p<0.001$ ）。

HPIでは参加群が5.3(1.8)点、中断群が4.1(1.9)点と参加群が高い傾向を示し（ $p=0.066$ ）、血糖値では参加群が114.9(26.0)mg/dl、中断群が105.4(33.2)mg/dl（ $p=0.062$ ）、HbA1cでは参加群が5.7(1.0)%、中断群が5.2(0.8)%と参加群が有意に高かった（ $p=0.045$ ）。生活習慣では夕食後の間食がある者の割合が参加群では7名(53.9%)、中断群では6名(20%)と有意に参加群での割合が高かった（ $p=0.033$ ）。

【考察】教室の中断群は年齢が低く健康習慣が少なかった。一方、参加群には糖代謝異常や夕食後の間食が多い者の割合が多く、加齢や身体状況になんらかの健康上の気がかりなものがあることと良い健康習慣を心がけ教室の参加を継続することに関連がある可能性が示唆された。

【結論】教室参加に関連する要因には対象者の年齢と身体状況が見られた。

地域看護分野の方の参加をお願いします。
連絡先：藤田俱子 宝塚大学看護学部
大阪市北区芝田1-13-16
大阪梅田キャンパス 06-6376-0853
t-fujita@takara-univ.ac.jp